
緋弾の...なんだっけ？

亜麻宮 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾の…なんだっけ？

【Nコード】

N2894Z

【作者名】

亜麻宮 巧

【あらすじ】

ATG (After disconnecting the strongest glasses) 「メガネを外したら最強」という変な能力を持つ主人公（転装生）の少女が、武偵中から始まる話です。

*この作品の主人公は非転生、非トリップです。

ちょっとあらすじかえました。 12 / 10

1話(前書き)

投稿!

1話

俺は今、武偵中の人試を受けていた。強襲科の。高校と同じ感じらしい。

俺にはふざけた力があつた。メガネを外すと、一般人の70倍とゆうふざけた力があつた。

だけど俺は使えない、モテモテ+女性を口説くと言つふざけた特典もついてくるのだ。

だが普通に目が悪い。発動中に目を閉じれば未来の映像が見えてくるので結果問題なしなんだが、最高発動時間は5時間。これをすぎると一日中高熱が起きる。

一応言つておくが俺：女だぜ？ざけんな、この力のせいで何人口説いてきたか、地味にとんとんと悪と戦いたいんですよ。

ま、転装生目指すし。

ちなみに俺はこの能力のことを、ATG (After disc
onnecting the strongest glasses
)と読んでるつまり「メガネを外したら最強」である。

合格ギリギリを目指して行く。

とするとバッテリー教官が「虐めですか？これ。」

仕方なくホルダーから、M1911を取りだし教官もとい、彼の横を打つ、

「どこを打っている」

「あなたの背中です！」

俺が打った弾は、壁に反射し、教官のあばら骨の上から2本目にヒットする。

うっし、教官倒したし、もう一人倒せばオツケーかな？

そんな事考えてる間に一人こっちに来た。

静かに彼は銃を構えようとしている。後ろから。

ちなみに今はメガネをバッチリつけている。
メガネ付けていてもAランクはあると思う。
母さんにしごかれてきたからな・・・。

同じく彼にも当たるように、もう片方からP228を出し、一弾は壁に、もう一弾はその弾かれたやつに当たるよう計算する。
そうすると彼の頭の真横を通って頬に一筋の切れ目ができ、血がたれ気絶する。

「さつて、誰かにさつさと負けるか」

何となく敵を探して……。

残念なことが起きた。

反射的に撃ってしまった。

相手はK。

「え〜〜〜」

俺の叫びはこの塔にさぞかし響いたことだろう。

結果：合格、Aランクで。

「あ〜ら、良かったじゃない一葉」

と、のんきに言っているのが俺の母、西条百合その人だ。この人はメガネを外すと性格が変わり、超強くなるのだ

「まあ、Bだから目立たないだろうし、教務科から転装生見とめられたし」

んで、一つ問題がある、何故か俺の行く寮が3年と同じ部屋なのだ。

まあ、ばれなきゃいつか。

入学式まで後、一ヶ月。

「どんな人かな？」

2話

男子寮、とある一室にて。

ピンポン。

「はい」

…出てきたのは、武偵高女子制服を着た美術品のような、美少女。
「……遠山金一さんの部屋と思ったんですが、間違えたようです、すみません」

ドアを閉めようとする……あれ？止められた。

「間違つてません、俺が金一です」

ま、まさかの女装癖!?

「いや、女装癖じゃないから、用があるんだろ？」

「え〜と、なんかですね？部屋分けのさいに何故かここになったんですよ、俺」

「教務課から連絡がきてたけどキミだったのか」

「ええ、はい。多分俺です」

それで中に入れてもらった。

「はい、これルームキー」

「ありがとうございます。ところで、あの格好は？」

現在は普通な私服だが、さっきのは…

「…キミがルームメイトならいつか」

と、話し始めてくれた。

ヒステリア・サヴァン・シンドロームという、なんかややっこしい病気で、人によって違うらしいが、彼の場合は女装することらしい。それを使った後は、極度な睡魔がくるらしい。

「大変な、病気ですね、さぞかし略称ではHSSですね」

「たしかに、そうともいえるな」

「全く関係ないですが、ちょっと先輩に化粧させてもらっていいで

すか？」

誰かに化粧をさせる、それが俺の趣味だ。

「いつかね」

ちつきしょー。めっちゃ楽しそうだったのに。ズーン。

「キミはその前髪がうっとうしくないのかい？」

「？一応、後々めんどくさそうなので言っておきますけど俺転装生なんで、目くらい隠しとこうかな」と

「！ほ、ほ、本当なのか？あまりにも男っぽい口調で、そんなしぐさだったから分からなかった」

「ごまかせてただ…」

「ま、それはともかく自己紹介でもしますか、俺は西条一葉、アラシク、ついでに転装生、これからよろしくお願
いします」

「俺は、遠山金一、よろしく」

…取り合えず話をしておくか。

「先輩、一つ聞いてもらえますか？」

「何をだ？」

「実は：俺、ふざけた病気があるんですよ、After disc
onnecting the strongest glass e
s通称ATG、つまりメ

ガネを外すと身体能力および、脳が活発化され、著しく強くなつて
しまふ病気です」

「本当か！」

本日二度目の本当と言う言葉をききました。

「はい。その代わり一定時間を過ぎると1日中高熱がでると視界に
入った女性をく、口説いてしまつと言うリスク
がついてきますけど」

金一さんが、肩を掴んで、

「今度、戦つてくれるかい？」

「本気じゃないといけませんよね？」

「あ」

2話（後書き）

金一さんってこんなんでいいんすかね？

3話

少し離れた、空き地島。

そんな、吹く風が気持ちい所では、めちゃくちゃ緊張するような空気が流れている。

金一さんはカナモード（後で聞いた）ではない。

今の装備は、武偵中の防弾制服。M1911。P228

「さあ、始めようか」

「はい。でも、通常がどれほど通用するかためさせてください」

「いいだろう」

俺は、前髪を全体的に後ろにもっていき、ゴムで縛る。

「この、コインが落ちたらでいいですよね？」

「okだ」

俺は、コインを親指でピンツと弾く。

ゆっくりとコインが落ちる。

チンツ

すると弾丸がこちらに向けて一直線に飛んでくる。

だが、これくらいなら今の俺でも避けられる。

俺は、反撃にでる。

M1911をホルスターから早撃ちの要領で打つ。

金一さんは、若干指を動かすと右前方が光る。

「っ、早うちか！」

俺の打った弾丸は大きく右にそれ、コンクリートの地面に当たる。

だが金一さんの弾丸はこちらに着実に向かってきて、ヒットする。

「グッ！」

これが防弾制服じゃなかったら死んでいた。

「そろそろ、メガネを外したらどうだ？」

と余裕の表情、現に一步も動かせていない。

「お言葉にあまえさせていただきます。それと後悔をしないでくだ

さい」

ゆつくりと俺はメガネを外す。

すると、金一さんは驚いた表情をする。

そして、状況は一辺する。

そんな小さな油断を俺は見逃さない。

実を言うと、俺は超偵に近い。

通常では使えないがメガネを外すと使える、2つを。

一つは、氷を操る能力G35。もう一つは――

「イメージ、構築」

私の手には、一振りの刀があった。

そう、もう一つは、イメージした物を作り上げる、武器限定でG

45。

この状態になると勝手に自分の一人称が私になる。

人とは思えないスピードで金一さんの後ろに回りこみ刃を返しなが
ら斬る。

故に倒れる程度。

「チエックメイトです。金一さん」

眉間の間に銃口をあてる。

「まいった。そしてどいてくれないか？」

金一さんは顔を赤くしながら言う。

現在、倒れている金一さんの腹の上に私が乗っている状況。

中一と中三だがこの状況はまずいだろう。

「すみません」

ゆつくりと立ち上がりながらメガネを掛ける。

その後、金一がその夜眠れなかったのは別の話である。

4話

翌日。

なんだか金一さんの様子が変わだ。

落ち着きが無いというか、そわそわしてるというか。

「どうかしましたか？」

「い、いやなんでもない」

そして何か歯切れがものすごく悪い。

今はかなーり普通の私服（男物）で銃のメンテをしている。

「今日何か用事ある？」

「いいえ特に、しいて言えば学園島の探索ですか」

「それなら、俺が案内してやろうか？」

「別にいいです。ちよつと家に帰ったりするんで」

…あれ？なんか落ち込んでね？

なんだったんだろう？

1ヶ月後。

かつたるい入学式が終わり、部屋に戻る途中だった。

「ちよつといいかな？」

見知らぬ少年に声をかけられた。

「僕は、探偵科1年美星大河だ。キミに聞きたい事がある」

推定身長、この歳では平均的以上な165程度（俺は155）の
いかにもインドア派みたいな奴が声をかけてきた。

「なんだ？」

「キミは1ヶ月前に、3年の遠山金一さんとバトった人を知ってる
かい？」

「いんや、しらねえ」

「そうか…いったい誰なんだろう。遠山金一さんを降参させたと言
う武偵は…」

「?そんな噂があるのかい?まあ、どうでもいいけど」

…マジで?そんな噂がたちやっつたのかよ…確かに俺だけだ。

「んで、キミは何でそんな人を探しているんだい?」

「僕はその人を探して、チームを組む!」

「なぜに?」

「だって、強い人いたほうが絶対今後の任務とか楽そうだし、それに……」

「それに?」

「び、美少女だったらしい。ぜひ見てみたいと思ってな」

顔を紅潮させながら言う。

シャイなのかこいつ。

「フーことでしらねえ。んじゃーな、根暗そうな顔した地味やるー。取り合えずその外見でそんなこと聞かれたら

誰でも気持ち悪がる。取り合えず髪をきつたり、メガネやめたりしろ。そうすりゃもうすこしは何かを聞く事ができるかも知れないぜ」

「何故、僕に声をかけられただけで避けられると分かった!確かにそうなんだけどさ……」

「…もつかえっつていいか?」

「ん、ああ。ありがとっ、キミの助言にちよっぴり感謝しよう」

? 取り合えず今日の昼飯何にすっかな?

5話

翌日。

「おはよう」

と昨日声をかけられた奴の音がする。

ふと後ろを振り返ると、

「誰？」

この歳からするとちよつぱり大きめな、紙はシヨートでいかにもスポーツできますと言われそうな感じの奴が声をかけて聞いた。

「僕だ。美星大河だ。君の言われたとおり、髪を切つたり、コンタクトにしたらむしろ逆に声をかけられるようになったよ」

「マジで？ほんとに同一人物？」

俺には信じられない。

「ああ。キミには感謝しよう。そして一緒にパーティを組んでくれないか？」

「めんどい、パス。そして死ねイケメン野郎」

「ふっ。諦めるものか。取り合えず名前だけでも教えてもらおうk
- - -」

右ストレートを喰らわせる。

そして教室に向かう。

「仮にも武偵ならそんなくらい自分で調べろ、探偵科ならなおさらな」

今日は初クエスト。教務科に向かい女として活動。

依頼は、港の密輸ルート of 廃止および犯人の逮捕。ランクA。

そして何故か金一さんが一緒。

ちなみに私の格好は白いフードで目元まで隠れるような全身白づくめ。目は常に閉じながらいる。

「金一さん、こんなクエスト一人でできますよ。しかも俺の強さ知っているでしょう」

何か『ギクツ』という幻聴が聞えた。

「別にいいじゃないか、同じルームメイトの初クエストに参加したって」

「なんですかその言い訳は」

「気にしないで、さあ行こう」

現場に向かう。

すると現場では、ふざけた黒いスーツを着たヤクザと思しき人影が。

取り合えず私の特技その一『声まね』でこう言う。

『ウ〜〜』

「ちっ、警察か！」

まずはその声を出しながら、録音しておいたボイスレコーダーで、

『お前達は完全に包囲されている。大人しく出てきなさい』

とワンパターンな説明をいう。

「ずらかるぞ、お前たち！」

ヤクザどもは倉庫の中の謎の穴に入っていく。

私はM1911を構えながらついていく。

弾は殺傷能力の無いゴム弾。

背後から撃つ相手が、拳銃で反撃しようなんてお見通しなので素早く接近。

首に手刀をいれ気絶させて、手錠で両手を固定。

結果、ヤクザ28人を逮捕。

クエストが終わり、自室に戻る。

「俺の出番は？」

6話

とんとん拍子で話が流れるのは早く今は夏休み、そして実家の西条家の入り口にいる。

『お帰りなさいませ、お嬢様』

と執事&メイド総勢20名ほどのお出迎えである。

つまり一葉はいいところ育ちのお嬢様だったりする。

「ただいま、みんな」

今はメガネをつけた状態だが極端に優しい声になってしまつ。

「今、母さんは何処に？」

「現在は自室にてデザインを考えていらっしやいます」

「ありがとうございます、三橋」

三橋（三橋 大河）は俺の専属の執事（男装）だったりもする。

俺は母さんの所に向かう。

「母さんいる〜？」

「はいはい居ますよ〜。一葉よくこの仕事する気になったわね」

仕事というのは、母の経営しているファッション誌のモデルと個人で経営している音楽会社のレコーディング。

母の方は武偵としてのクエスト（E 1.0単位）自分のは、会社の歌手として。

「取り合えずちゃちゃっと撮影すませちゃおうかしら」

「そうだね」

執事に車に乗せられて、母の会社の撮影室に向かう。

「おっと、その前に着替えてもらおうかな」

「了解」

変更、メイクルームに向かう。

徐々にカツラを取ると今までは肩にかかるかかからないかぐらいだったのが腰の辺りまでの綺麗な銀色の髪が出てくる。

「ちよっといたんでるかな？」

メガネを外し、自分で薄いメイクをして白いかわいらしいフリルのついたワンピースを着る。

自分でいうのは何だがさまになっていると思いたい。

「母さん。終わったよ」

母の前まで行くと抱きつかれた。

「やっぱかわいい、自分の娘だとしても食べちゃいたい」

ヤバイ、母さんが暴走してきた。

「ストップ。ささつと終わらせようよ」

その後、何着か着替えながら無事に撮影は終わった。

撮影された本は『忙しい武偵にも分かる今時のファッション』だ
そうだ。

これに乗っているのは全員現役武偵だ。

「次々」

今は自分が小5の時に母に我が儘を言って立てた会社だ。

「さつとはじめちやうか、三橋」

私がボーカル、三橋がギター。グループ名『124』

これは単に私の誕生日が12月24日だからである。

何故か、PVまで取る事になり終わったのは夜の7時頃。

初のCDがなぜPVまで？

社員に聞くと、

「絶対にヒットするから」

だそうだ。

7話

久々に母と出かける事になった。

「そつよ空港、今日はプレゼントがあるのよ」
「？」

今いるのは成田空港、その外れの一角の普段はメンテナンスが行われているような場所につれてこられた。

「ここにあるへりはあなた専用のへりよ」

…へ？

「だから、ここにあるへりはあなたのもよ、ああ、ちゃんと武偵で資格とつたらね」

「あ、ありがとう」

「いいえ、いいえ。それと一葉には悪いんだけど…」
「何？」

「1年くらい世界中で武偵活動してもらいたいのよ」

「拒否権は？」

「もちろんなし！でも三橋はつけるけどね、学校にもいつちゃったし」

……とんでもねえ話だなおい。

とゆうことで結果的に俺は各国を回る事となった。

「ハア」

ロンドン武偵局。

「え〜とファーストミッションは…」

「通り魔の逮捕です」

「ありがとう、大河」

現在、少女2名で働いてるわけだが、え？大河は執事だから男ではないのか？いや、女ですよ？

しかも男装美少女。

「さつさと行こうか大河」

「了解です、お嬢様」

とゆうことでもちろんズラもメガネをつけていない状況だから視力が現在0.2しかないわけでf a t eのライナーのような目隠しをつかちやっている。

「さつとと始めますか」

「はい」

…私に二つ名ができていた。『白猫』

今まで自ら逮捕してきた犯人は1人、その他100人以上は自主とゆうだいが変わったタイプの武偵だ。

主にM1911を使い、今まで受けた仕事の犯人は改心させられ今は真面目に働いている奴もいる。

市民からは、かなり他の武偵とは違って町への被害はほとんど0にしとしい。

不幸を運ぶ『黒猫』ではなく幸せを運んできた『白猫』といわれ
ている。

一回ピンクのツインテールの子を助けたりもした。

そんな感じで1年ロンドンでの武偵活動も終わり、2年の二学期の後半と言う微妙な時期に戻ってきた。

現在、教室入り口。

「西条さん、三橋さん。入ってきてください」

「はい」「はい」

現在銀髪はポニテール。メガネ着用、そんなかつこうだ。

んで、大河は首のちよつとしたのあたりで黒いストレートの髪をたばねている。現在、執事メイドである。きちんと制服だが。

「え〜と、俺は西条一葉です。この髪は地毛で、父の形見の感じ
できません。まあ、よろしくお願いします」

簡単に自己紹介を終わらせ席に着く。

「私は三橋大河です、一葉様のメイドをやらせて頂いています。特

「技は料理程度です」

さすが大河、しつかりとしている。とても同じ中二とは思えない。大河は、俺の横の席にちょこんと座る。

「じゃあ、皆二人に質問あると思うから1時間目は自習ね」

『先生サイコー』

そんなんでいいのか高橋先生！

「んじゃまず、私から一葉さんに質問、去年この学校にいたよね？
1学期だけ」

「いたぞ。1Cに」

現在は2A。

「次俺、前は何処いたの？」

「二人ともロンドンにちょこつと。たいさ良い成績は残せなかったけどな」

丸々嘘。本当はバツチリ2つ名までついたし。

ちなみに大河は『冷徹の死神』顔色一つ変えずに淡々とクリアしてきたから。

「三橋さん彼氏いる？」

「いません」

ホント冷たいな、俺の前ではあんな言い表情できんのに。

「ランクは？」

「二人ともB」

本当はSだけどね。

「文化祭が3日前なんだけど、高校の変装食堂の真似をしてこの学年もやるんでどくじ引いてくれる？」

なんかでかい箱を誰かが持ってきた。

それを引くと『武偵高女子制服』

俺の眉毛がピクピクと動く。

えっと、大河は…『メイド』

そのまんまじゃん。

「二人とももう一回引くチャンスがあるよ？」

「もち、やり直す」

「私毛」

いいじゃん大河はそのまんまなんだから。

次は…『武偵中女子制服』

「誰かの陰謀か！」

とくじ引きを机に叩きつける。

チラツと横を見ると大河は『執事』

「決定ね。ああ、制服は私の予備のを貸してあげよう。そしてこれから1週間は文化祭準備だから」

……この世界に神はいないのか……。

「取り合えず君名前は？」

「私？柊嘉穂」

「ん、よろ」

昼休み。

「なあ、大河？お前怒ってない？」

「別に怒ってません！」

絶対怒ってるよな……。

「はあ〜。取り合えず俺の作った弁当少し分けてやるから機嫌直せ

よ」

「は〜い」

直るのはやつ！

「一葉様はい、あ〜ん」

「自分で食べられる」

「そんなこと言わずに（怒）」

「お、おう」

ってな感じで、2人つきりになると何故か大河は俺にべったりとくっついてくる。

やっぱアレが原因なのか？

〜回想〜

俺が始めて大河にあつた一昨年のことだ。

「始めまして、三橋大河です。よろしくお願ひします、お嬢様」と、硬かった。

丁度俺がメガネを拭いている時に入ってきたのだ。

直接見なければ口説かないのだがダイレクトで見ってしまったため、勝手になんか口説いてしまった。

「キミは、どうしてそんなに可愛いのか？」

「い、いや私なんか可愛いはずがない、名前なんて男っぽいし」

「名前なんて関係ない、キミはキミだ。私は本当にキミが可愛いと思っているさ、今もこれからも」

って感じに。

ちなみにこのとき口説いた人の数が丁度50人目だった。

終わり。

今現在は158人。

自分でも泣きたい。

「大河、この後準備だぞ。はあ。なんであんな格好しなきゃなんだよ…」

午前は基本的に細かい配置、大道具の作成など。

ついでに言うと高校と中学とでは2日違うらしい。

「私だつて…一葉様以外の人にあんな口調を使わないとなんて…」

「ん？何か言つた？」

小さくて全然聞えなかつた。

「なんでもありません」

8話

教室にて。

そこには銀髪の美少女と格好いい執事がいた。

簡単に前髪を後ろのほうで束ねて、メガネをつけている状況。薄っすらメイクもしている。

とゆうか俺と大河だ。

「えっと…西条だよね？」

「そうだが」

「そして三橋さんだよね？」

「ええ」

（ありえん）とクラスの気持ちちがまとまった瞬間だった。

「本当に西条くん？」

「ん？柊かって何だよその顔！」

一言でまとめるなら厚化粧。

衣装からするとチャイナドレス。

なんかイラッときた。

「大河、取り合えず俺の道具もってこい」

「ここに」

さすが、手際がいいな。

「柊、1分間だけ目閉じていてくれないか？」

「え、ええ」

俺はメガネを外し目を閉じまずこの厚化粧を落とす。

その後、私的テクで薄っすらと、いい感じにメイクをする。

おおよそ43秒。

メガネを掛けながら、

「柊、これを見る」

手鏡を渡す。

「え…これが私？」

「本当だ。この俺を甘く見るとこうなる、ついでに髪もセットしてやるつか」

「お願いしK……」

といい終わる前に終わりにする。

コイツの髪質がよかつたから楽だった。

ちなみにあの後ろ側にお団子を作る感じでやった。

『キヤー凄』

教室が沸く。

「うるせえよ」

「ねえ西条くんってこうゆう事が得意なの？」

「まあ昔から大河に実験台になつてもらつたし」

「そうなんだ」

「そうなんだよ」

これを覚えるのに2年かかちやつたもの。

自室にて。

「一葉様」

と部屋に入るいなや抱きついてきた。

「やめてくれ大河。そして様をつけるのをやめろ、そして晩飯作っ

てくれ」

「了解、一葉」

大河が作つてくれるとゆうことなのでシャワーを浴び始めた。

最近はなんだか若干胸の辺りにさらしをまいているの辛くなつて

きた。

「くくく」

鼻歌を歌いながら髪を洗ったりする。

今では解くと膝ぐらいまである。

切ろうにも3年前に死んだ父との数少ないつながりだから切れない。

銀色の綺麗な髪、翡翠色の目、それを私は受け継いだ。

普段は目立ちたくないからカラーコンタクトをつけている。

その後3分後体を拭き、私服（男物）を着てリビングに向かう。

「一葉ご飯できてる……」

「ん、ありがとう」

私は声をかけられた方向を向く。

やっぱり……くはない、この体質は同じ相手を2度は口説かない。

パシャッ。

何の音かを見ると携帯で写真を取られた。

「二年ぶりの素顔……これで3杯はいける」

大河は凄いいい笑顔でこっちをみた。

「大河、今日の晩飯は？」

「豚肉丼です」

凄くテンションが上がっていた。

ピンポーン

「誰だろ」

玄関のドアを開けると、

「一葉、久しぶり」

金一さんがいた。

8話(後書き)

とつとつ恋愛開始!?

9話

金一さんがいた。

「おひさです。金一さん」

とかるーく返事をする。

「ちよつと今時間あるかい」

「ちよつと待っててください」

私は大河に「ちよつとでかけてくる」と言っつて寮を出た。

「お待たせしました」

現在の格好は、Tシャツにジーパン+メガネ、カラコン。

今は、金一さんに連れられて、ちよつと夕日の綺麗な公園にいる。

「そつちよくに言わせてもらっつ」

「？」

「俺は、お前の事が好きだ！」

「…えつ…」

今なんていった？もしかするとこれは…こゝ、こゝこゝ告白！？

「えつとだな、お前に好意を抱いている」

「えつとこんな私で好ければ」

「ああ、よろs…」

といきなり口と口との距離が0になった。

後ろを見るとボールがどうやら金一さんの頭にヒットして私の顔にぶつかったらしい。

つまり、キスをしてしまっているような感じだ。

「~~~~~ッ」

金一さんの顔がかなり真っ赤だ。

おそらく私もだ。

何かお互い気まずくなり無言の状態て3分の苦しい空気が流れた。
誰かこの空気どうにかして〜。

「アレ？一葉じゃない」

一番来てはいけないような、母が来た。

「えっと、母さん？どうしてここに？」

「仕事の気分転換。そしてそこにいる男の人は？」

「（か、彼氏です）」

と母の耳元で小さく言う。

「そうなの！じゃあ、お邪魔ね。明日の仕事忘れないでね」

「了解」

母は帰っていった。

「えっと、さっきの私の母で、ちょっとした会社の社長やってます」

「えっと、たしかちよつとどころじゃなくてかなり大きい会社の社長さん：西条百合さんだよな？」

「何故それを？」

「いやちよつとクエストで」

「そうなんですか、あ、これあげます」

私はコンサートのチケットを渡す。

「124のライブのチケット！？これしかも特等席」

「私はさっき母の言ったように自分の仕事があるのでいけません、よかつたら使ってください」

「こんなレアもの何処で？俺が頑張って探したけど見つからなかったチケットを」

「ああ。それですか？私の経営している会社のバンドなんですよ。うん、嘘は言ってない。そして私が歌っているのも言ってない。

「えっとつまり社長さん？」

「はい。社長やっています。でもほとんど副社長にまかせっきりなんですけどね」

「このチケットありがたく受け取っておくよ」

「もうそろそろ帰らないと私のメイドが怒りそうなので帰りますじや」

「メイドっせー！！！！」

金一さんの頬にそっとキスをし帰った。

9話（後書き）

次回はちょっとバトルを入れる予定です。

10話

現在午後7：30、もうすぐライブの開始だ。
現在楽屋にてメイク中。

今回は『124』の初ライブだったりする

「もうすぐだね」

「準備はバッチリだよ」

「ちよつと舞台のぞきn「パンツ」銃声！」

私はM1911をスカートの下のホルスターに入れる。

弾は殺傷能力のないゴム弾。

「いくよ、大河」

「了解」

急いで舞台に行くと、不振そうな約40代の男が挙動不審に動いていた、右手には拳銃ベレッタM92。

男はこちらにきずいたのかこつちに向かってきた。

「その二人、124の二人だな」

「ええ、そうよ。それがどうかした？」

「一緒に来てもらおうか、会場に運悪く武偵が1人いてよう、つい
うっちまったぜ」

ピキッ。

私の何かにヒビが入った。

金一さんが？そんな、

「あんた今なんていった？」

「だから、こいつで撃ったんだよ。武偵を！！」

「お前を殺人未遂、銃刀法違反の容疑で逮捕する！！」

「なにを言っただ嬢ちy……」

私はホルスターから金一さんの技をかり、不可視弾を繰り出す。

男は何が起きたか分からないようにその場に倒れた。

「午後7時43分。現行犯で逮捕」

丁度うまい具合に逮捕した直後誰かが来た。

「ここは危険だ、早くここをh……キミは？」

金一さんだ。

「私は武偵中二年、それ以上はいえませんが。遠山金一さん失礼ですがこの容疑者を警察に運んでくれますか？」

「ああ。いいだろう」

「一つ追加で言うと私は『白猫』です」

そういつて立ち去る。

その後1時間遅れという形でライブは始まった。

翌日。教室にて。

「おっは〜西条くん三橋さん。昨日の『124』ライブでテロ犯があつたつてしってる？」

「知らん」

俺達だが。

「そうなんだ。二人とも今日の文化祭、張り切つていこう！」

「お〜（超棒読み）」

ピンポンパンポン

『えっと、二年の西条一葉、2分以内に職員室に来い』

ピンポンパンポン。

理不尽すぎね？

「てな訳で大河。俺行ってくるわ」

「了解です」

ちよつと走るとあら不思議、あつと言つ間に職員室へ。

「1分09秒、まあまあだな」

とそんなこと言つのが別名『鬼の鳥町』こと鳥町修護先生だ。

「んでなんですか？」

「お前、転装生終了な」

は
？

11話

「お前、今日から転装生終わりな。お前のお袋さんから連絡があった」

「は？」

「とゆうことでこれ使え」

制服を渡される。

理不尽だ。

結果としてこれを着ないといけないから大変である。

いざ出陣の前に、更衣室へ。

さつくと着替えると、いい感じに盛況していた。

11月1日それが現在の日にちである。

現在の格好は女子制服に普段ポニーテールの髪はほどき、コンタクトを外した状態である。

「さつととやりますか」

厨房に向かうと担任の高橋がいた。

「先生何すればいいですかね？」

「貴様、誰だ？」

「俺です。西条です」

「！。ほんとに男か！」

「ついさつき転装生終わりと告げられ女に戻りました」

「そうか、じゃ接客よろしく」

俺はかくしてフロアと言う戦場にかりだされた。

「3番のお茶まだ？」 「9番、紅茶とナポリタン」 「カウンター誰か！」

とありふれた戦場（食堂）の風景があった。

「そのキミ、突っ立てないで、10番のオーダー取ってきて」

「了解」

十番テーブルに行くとも一年2人がいた。

確か、不知火と…誰だ？いかにもネクラそうな男だ。

「ご注文はお決まりでしょうか」

「コーヒーとオレンジジュース1つずつ」

「コーヒー一つとオレンジジュースお一つですね？」

「はい。お願いします。ところで先輩、お名前は？」

「仮に武偵なら自分で調べなさい。では」

厨房にオーダー表を持っていく。

「十番テーブルオレンジ（以下省略）」

こうして一応順調に進…まなかった。

「か〜ず〜は！」

この声はまさか！

11話（後書き）

次回、主人公の双子の弟が登場します。

12話(前書き)

今回物すんごい短いです。すみません。

12話

この声はまさか！

後を振り返ると不良のバカこと私の双子の弟西条一馬。

難なく抱きつこうとしている右腕を掴みもう片手でメガネを取り
氷ずけにする。

綺麗に人間氷樹の出来上がり。

『ふっ甘い！』

一馬は炎を使い氷を溶かそうとするが解けない。

G10が笑わせるな。

コイツにはメガネを外すと（以下省略）はない。

私と母に打たれた薬品のせいだから。

その際に父は死んだ。それは私が10歳の誕生日の前日だった。

この病気、いや呪いを私は早く解きたい。

おっとこんな暗い話ではなく、可愛そうになってきたので溶かし
てやる。

「どうした、家にろくに帰ってこないバカ愚弟」

「ひどい！俺がモンゴルの辺りで修行してたの知ってるくせに！」

「だまつてください。お静かにできないようでしたら、帰ってもら
いますよ？お客様」

「まさかの敬語?!」

「んで、転校は何時からだ」高校から「そうか」

こいつは意地っ張りなので中々自分で決めたことをあきらめない。

「さっさと帰れ愚弟。後てきっちりしばいてやるから」

「え〜」

といいながらも帰る弟。

その後特に問題なく終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2894z/>

緋弾の...なんだっけ？

2011年12月17日23時54分発行